

寛永熊本地震の考古学的検討

齋 藤 友里恵

1. はじめに

本稿の目的は、熊本城が被災した寛永二年（一六二五）六月十七日の地震について、被害の実態を考古学から明らかにすることである（¹）。

この寛永熊本地震に関して、延宝年間の成立とされる『丁巳雜録』に以下の記事がある。

史料A 丁巳雜録 全（²）

一、寛永二年六月十七日肥後熊本大地震、夫に付小倉より御飛脚貳人七月廿二日被遣候、十七日○夜 ゆり天守其外城中之家々から木斗残りて瓦引物等も皆々落崩城中に人五十人斗死申候、塩硝蔵ともすりに火出候而跡もなく吹ちら

しあたり八けん十町二十丁之間は家残りなく吹ちらしゑんせう八万斤の上有之つる故に倉之下石垣何も屋根瓦五里七里之上飛散り齊藤伊兵衛殿防庵の家も捐し少々完作事被仕候城之儀先江戸江被仰伺之由に候、此方より之御使伊藤金左衛門組中川毛助・熊谷平左衛門組窪田徳助兩人江御帷子一ッ完被下候由之事、

防庵坂の事此坂上に捧庵と申人住居せし故其名有りと聞傳へしに此防庵之事なるへし、然し如故何なる人と云事未考、

史料Aは、熊本城において天守や建物から瓦などが崩れ落ち、城内で約五十人死亡したこと、また煙硝蔵（火薬庫）が爆発して、十〜二十町の間にあった人家が跡形もなく飛び散

ったことを伝える。この地震は二代藩主加藤忠広の時代に発生した。忠広は地震から七年後の寛永九年（一六三二）に改易され、豊前小倉から細川忠利が入部する。

史料B 土方雄高宛細川忠利書状⁽³⁾

家中之家事之外損、思召外ニ而候、其上材木無之所ニ候、若御座候ハ、遙々山奥ニ而役ニ立不申候、殊去年之日やけニ給物さへ無之駄にて、中々家など有付可申儀にて無御座候、城之儀は、事之外矢倉多、家もつまり、少も庭無之候上、度々地震洵申候故、本丸ニ居可申様無之候て、下ニ花など作候て事之外廣屋敷御座候間、先それニはいり候て居申候、

史料Bは、忠利が肥後に入った翌年の寛永十年（一六三三）、伊勢孤野藩主土方雄高に宛てた書状で、城は櫓や家が詰まり庭がほとんどないうえ、度々地震があるため、城下の屋敷に居住しているとある。「屋敷」は、城の南にあった花畑屋敷をおそらく指し、熊本城からそこに拠点を移していることがわかる。忠利は寛永十一年（一六三四）、石垣など被災部分の修復許可を幕府に求めて復旧に着手する（後藤二〇一六、二〇一七a、二〇一七b）。

以上の史料が示すとおり、寛永期には有感地震が度々発生

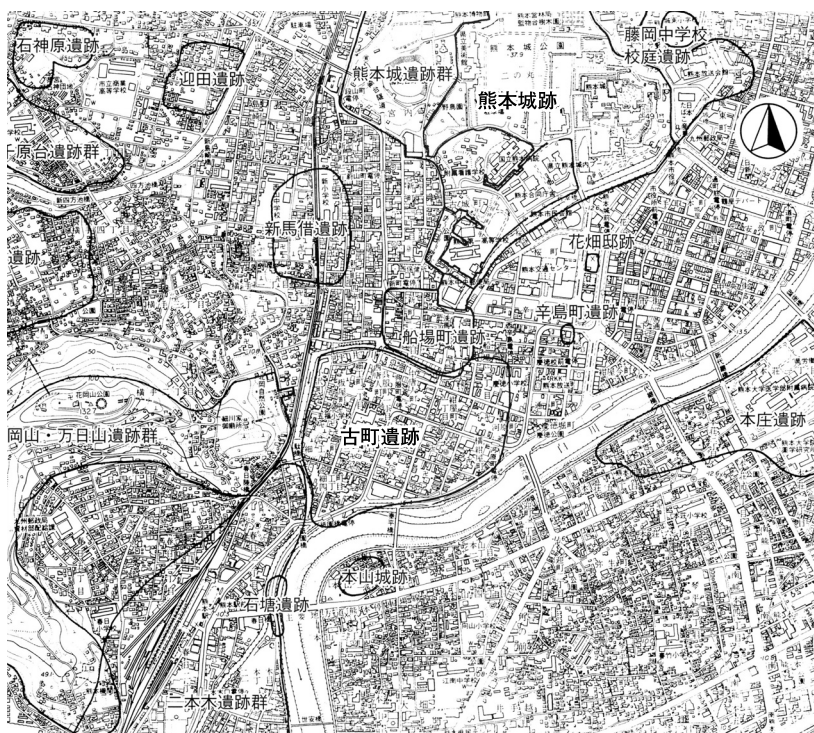
し、特に寛永二年六月の地震は熊本城に大きな被害をもたらした。地震被害の全体像を明らかにするには、これらの史料の分析とならんで、発掘調査で得られた考古学のデータも重要である。しかし、これまでの熊本県域の地震痕跡集成では、熊本県菊池市木野鞠智城深迫門跡の土塁版築にみられる不整合が最も新しく、中世以降の事例は知られていない（宮崎二〇〇六）。

近世の地震痕跡は本当にないのか、本稿では噴砂や断層以外の形で地震被害が現れている可能性を想定しながら、熊本城及び周辺遺跡のデータを点検し、寛永熊本地震の実態に迫りたい。

2. 熊本城の異変

熊本城は、天正十六年（一五八八）に入部した加藤清正が茶臼山に築いた平山城である。熊本市中心部に向かって延びる京町台地の南端に位置し、城の西に井芹川、東に坪井川と白川が流れている（第1図）。

寛永熊本地震は、清正の子・忠広の代に発生した。忠広は復旧に着手するが、寛永九年（一六三二）に改易となり、細川氏の手で城の修復・改築がおこなわれる。明治四年（一八七二）に鎮西鎮台が設置され、陸軍の管理下で一部の櫓や石垣が改修されるが、明治十年（一八七七）の西南戦争により



第1図 熊本城・古町遺跡の位置 (原田ほか 2004)

櫓の大半が焼失、明治二十二年（一八八九）の明治熊本地震で石垣が崩落した。

熊本城の東側は急峻な崖を利用して高石垣を積み、傾斜のゆるやかな西側は二重の堀と二の丸・三の丸を配して守りを固めている（第2図）。最も標高が高い北東部分に本丸を設け、重臣の屋敷を置いた飯田丸や教寄屋丸などが囲む。

城内の発掘調査は、これまで石垣の修復や櫓の解体修理・保存復元に際して行われてきた。そのため郭中心部の発掘は少なく、『丁巳雜録』に登場する煙硝蔵の位置もいまのところわかっていない。このような制約があることをふまえたうえで、寛永期の地震痕跡を探してみたい。

奉行丸 西出丸の南に位置する。細川時代に奉行所を置いたことから奉行丸と呼ばれ、隅に元太鼓櫓、未申櫓、井樋方櫓、御客方櫓を配置する。石垣保存修理事業にもなつて発掘調査が行われ、中央付近で「崩落痕」が確認されている。

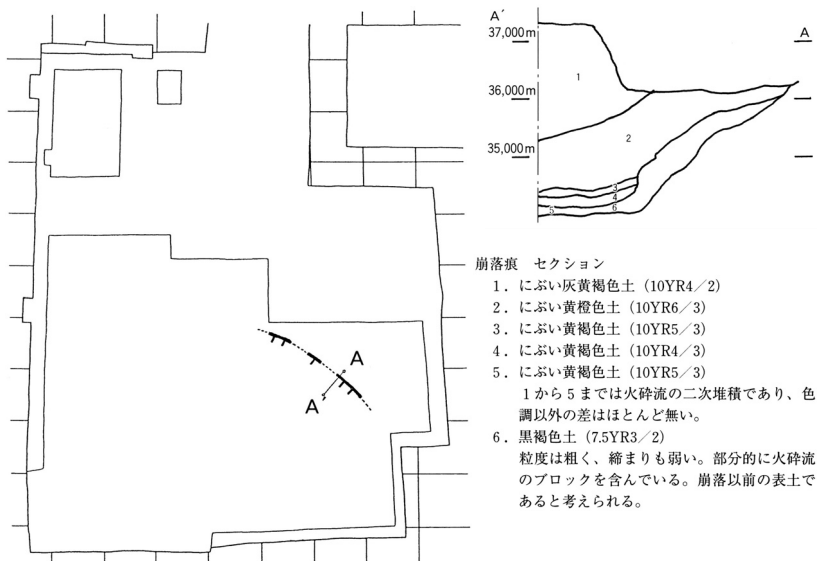
これは熊本城の調査で検出された唯一の地震痕跡で、第3図がその土層断面である。「5・6」層が崩落土で（4）、3・4層が埋め立てて復旧した整地層と報告され、「寛永二（一六二五）年に



第2図 熊本城縄張図 (北野 1993)

熊本地方に大地震が発生し、城内に多数の被害があったことが記録に残っていることから、その時の痕跡である可能性が高い(今村ほか一九九九・一六一頁)とする。調査で確認された遺構の配置と、寛政四年(一七九二)頃成立した奉行所図など(5)、十八世紀の絵図との間に特に違いがないことから、崩落はそれ以前に発生したものであるという判断のようだが(6)、寛永二年の地震に原因があると判断する積極的な根拠はない。

飯田丸 復元整備にともない五階御櫓・百間御櫓周辺の調査が行われている。第4・5図は五階御櫓部分から出土した陶磁器類である。1は播鉢で十三〜十四世紀。2は漳州窯系青花碗で、十六世紀末〜十七世紀初頭に位置づけられている。9・11は肥前陶器の皿で、9は肥前Ⅰ期(一五九〇〜一六一〇年代)、10・11は肥前Ⅱ期(一六一〇〜一六三〇年代)



第3図 熊本城奉行丸の「崩落痕」

に属する。3・4は肥前磁器碗で、3は十七世紀中頃の碗、4は十七世紀末～十八世紀初頭の染付である。

5～8はヘラ描き肥前系端反碗で十九世紀代、12も網田焼で十九世紀代、18～28は近現代の製品である。十七世紀中葉から十八世紀の陶磁器はほとんどなく、十七世紀前葉までと十九世紀以降とに大別される(第1表)。

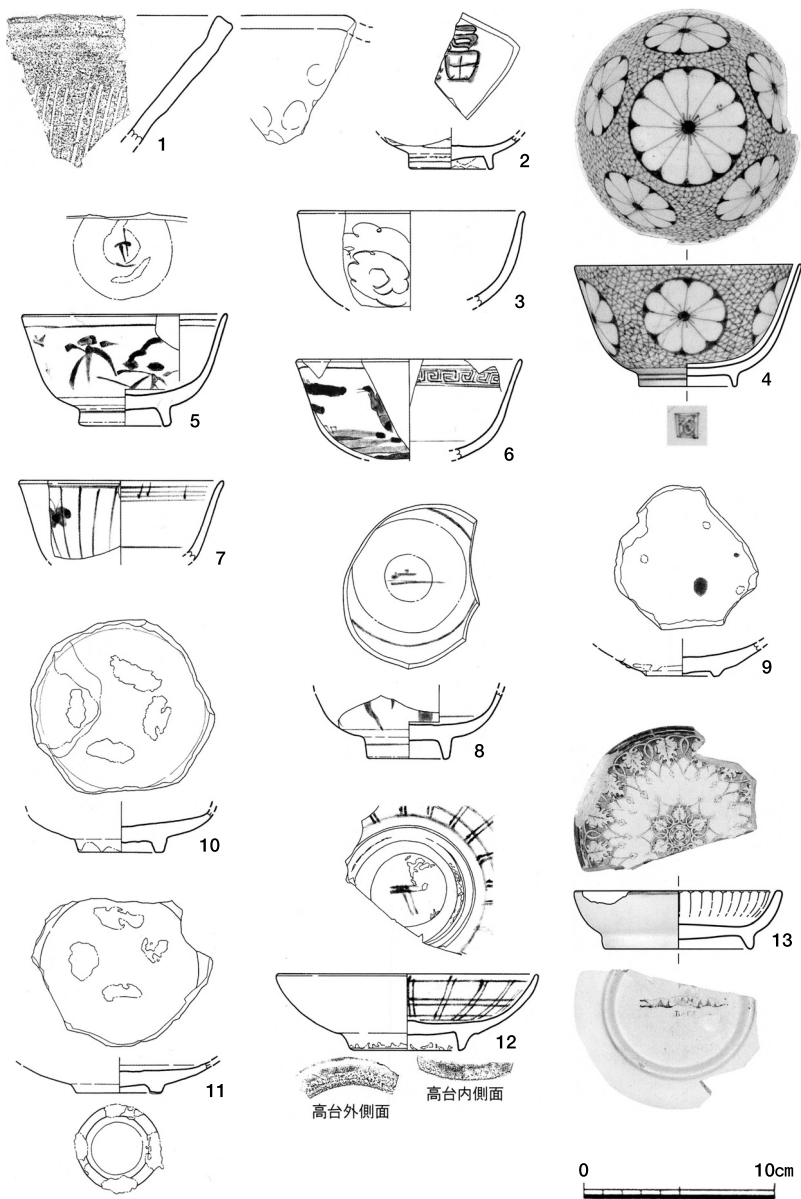
報告書はこうした「十七世紀後半代以降になると遺物の量が極端に少なくなる」理由として、「江戸中期ともなると西櫓御門が閉鎖され曲輪の北東隅には門が設けられて閉鎖的な空間に変貌し、曲輪内にある蔵や櫓を利用した収蔵機能中心の曲輪に変化したことの反映であろう」(鶴嶋ほか二〇一四…二八三頁)と説明する。しかし、「収蔵機能中心の曲輪」にシフトしたのであれば、収蔵していた品が出土してもよいはずである。次の史料に注目したい。

史料C 寛永十三年六月十六日付「奉書」(7)

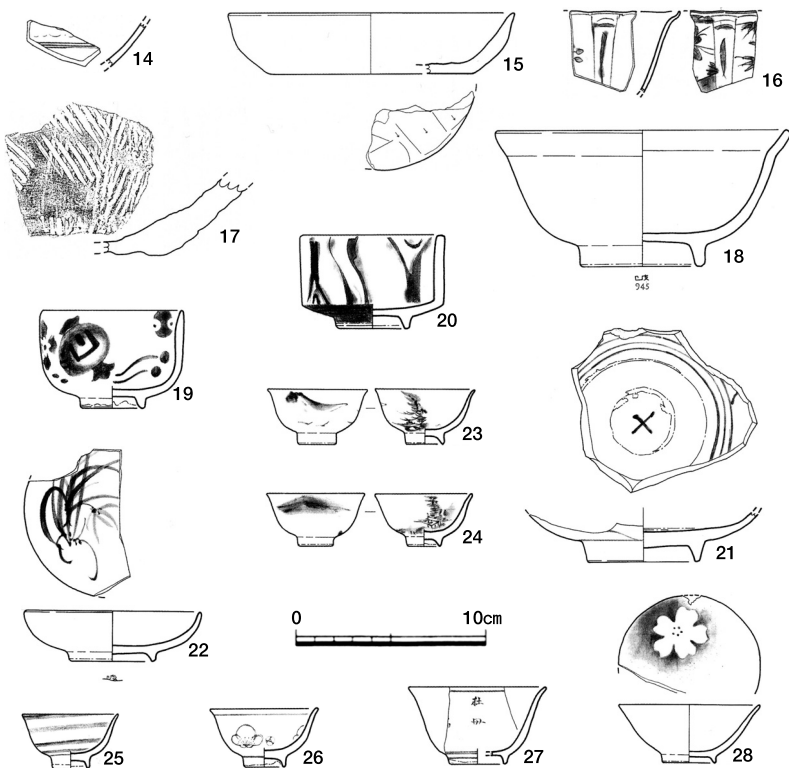
一 御花畠へ被成 御移徙二付、御本丸ノ御廣間、御居間并大御番所御番衆之書立、懸 御目候処ニ可然被 思召候間、如書付可申付之旨、御直ニ被 仰出候事、

史料D 寛永十三年七月二六日付「奉書」(8)

一 大番所之御番、御花畠ニ被成御座内ハ引、御本丸へ御



第4図 熊本城飯田丸・五階御櫓出土陶磁器①



第5図 熊本城飯田丸・五階御櫓出土陶磁器②

移り被成候者、如前之可申付旨、
奉、斎・主馬・亀丞、則明日方引
可申事、

史料C・Dによると、細川忠利は寛永十三年（一六三六）六月に本丸から花畑屋敷に移る。そして七月十五日には忠利自筆の達を出して、毎月三日・八日・十三日・十九日・二十五日を御用日と定め、奉行衆が花畑屋敷に参内するようになったという（9）。これらをふまえると、遺物量の急激な減少は、熊本城本丸周辺の拠点性が相対的に低下した点に原因をもとめてよい。そして、『丁巳雜録』の記事や土方雄高宛細川忠利書状を勘案するなら、寛永熊本地震によりすでに飯田丸が使用不可能な状態に陥っていた可能性も充分考えられるだろう。

3. 熊本城下・古町の異変

中世までの町屋・古府中は、現在の熊本駅周辺にあたる熊本市西区二本木遺跡

第1表 熊本城飯田丸・五階御櫓部分出土陶磁器類

	器種	産地	年代		器種	産地	年代
1	播鉢	備前	13中～14前	15	杯	在地	17世紀
2	碗	漳州窯系	16末～17初	16	小鉢	景德鎮系	16末～17初
3	青磁碗	肥前	17中	17	播鉢	備前	16末～17初
4	染付碗	肥前	17末～18初	18	飯碗	岐阜	1941～46年
5	染付碗	肥前系	19初～中	19	小碗	不明	19末～20前
6	染付碗	肥前系	19初～中	20	碗	不明	20前～中
7	染付碗	肥前系	19初～中	21	染付皿	肥前系	19後
8	染付碗	肥前系	19初～中	22	小皿	岐阜	1941～46年
9	皿	肥前	1590～1610年代	23	小杯	不明	近代
10	皿	肥前	1610～1630年代	24	小杯	不明	近代
11	皿	肥前	1610～1630年代	25	小杯	不明	近代
12	染付皿	網田焼	19中	26	小杯	不明	20前～中
13	小皿	ドーソン窯	1840～1864年	27	小杯	不明	19世紀
14	皿	外国？	不明	28	小杯	不明	20前

群にあった（第1図）。それを天正十六年（一五八八）に入部した加藤清正が熊本城近くに移転させ、最初に形成されたのが古町である（原田ほか二〇〇四）。町屋は基盤の目状に正方形で区画され、それぞれ中心に寺院を配置する。

古町遺跡は、白川の旧流路とみられる水成堆積層と自然堤防の上に形成され、一部の調査区では堅く締まった近世の整地層も確認されている。出土した遺物は、町割が行われた十六世紀末以降のものが連続しており、これらに従って遺構の年代を整理すると、

A 十六世紀末～十七世紀前葉

B 十七世紀中葉～後葉

C 十七世紀後半～十八世紀以降

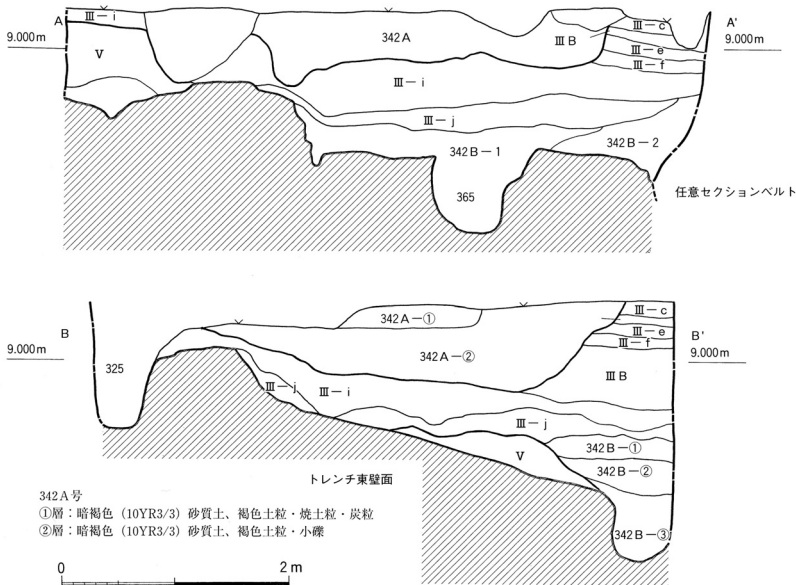
の三つのグループに分けることができる（第2表）。ここで注意したいのは、BグループとCグループとは十七世紀後半の時間的重複があるのに対して、AグループとBグループの関係はそうではない。Bグループの遺構にはAグループの年代の遺物は含まれず、十七世紀前葉から中葉へは連続性がみられない。

この不連続の背景を考えるうえで重要なのは、A-4区342号遺構の出土品である。342号遺構は溝状遺構で、遺物の年代は十七世紀前葉までに収まり、右の分類のAグループに該当する（第6図）。ここから出土している遺物が第7図である。

第2表 古町遺跡遺構年代

調査区	遺構番号	主な出土遺物	年代	グループ
A-1区	31号	天目碗、染付碗、皿	16後～17初	A
	37号	皿、白磁皿	16後～17初	A
	112号	染付碗、皿、小皿（土師器）	16後～17初	A
	115号上面	小杯、皿、小皿（土師器）	17後～18前	C
	117号	皿、片口鉢、火鉢、搦鉢	16末～17初	A
	124号	碗、皿、火入	17後	B
	125号	碗、德利、片口鉢、搦鉢	17中～18初	B C
A-2区	145号	染付碗、鉢、土瓶、カンテラ	18後～19中	C
	154号	染付碗、皿、土瓶蓋	19中	C
	164号	染付碗、色絵碗、壺、小杯	17後～18中	C
	172号	小瓶、火入	17後	B
	178号	碗、白磁皿、皿（手塩）、壺	18～19中	C
	179号	碗、皿、土瓶蓋、炮烙	18～19中	C
	183号	染付碗、皿（手塩）、植木鉢	18～19中	C
	188号	小杯、染付碗、皿、搦鉢	17後～18中	C
	195号	碗、皿、猪口、土瓶、火入	17後～19中	C
	196号	染付碗	18前～中	C
	198号	染付碗、皿、土瓶蓋、火鉢	18～19中	C
	206号	染付碗、小杯、土瓶蓋	18～19前	C
	207号	碗、鉢	18世紀代	C
A-3区	223号	染付碗、碗蓋、灰落とし	18中～19中	C
	295号	染付碗、皿、小皿（土師器）	16末～17初	A
	296号	碗、皿、德利、香炉	17中～18前	B C
	305号	碗、皿、小杯、搦鉢、土瓶	17後～19中	C
A-4区	342号	碗、皿、小皿（土師器）	16～17初	A
	373号	碗、皿、小杯	17中～後	B
B-1区	皿層	陶器皿、染付皿	16～17前	A
B-2区	64号	皿、仏飯	18世紀代	C
	71号	小碗、皿、小皿（土師器）	17後～18前	C
	72号	大皿、碗	16末～17前	A
	74号	碗、皿、蓋（小壺類）	17後～18前	C
	88号	碗、皿、大皿	16末～17前	A
	90号	碗、火入	17後	B
	94号	碗、皿、中皿、蓋	17後～18前	C
	96号	碗、蓋、小皿（土師器）	17中～後	B
B-3区	155号	碗、皿、火入	17末～18	C
	156号	碗、皿、段重、花生、壺	17後～19中	C
	161号	碗蓋、皿	18中～後	C
	169号	碗、蓋、皿、片口鉢	17末～18	C
	192号	碗、碗蓋	17中～18中	B C
	203号	碗、皿、灯火具	17末～18前	C
	235号	碗、仏飯、火入、香炉	18～19中	C*
B-4区	242号	碗、皿、小杯、油壺、焜炉	18～19	C
	243号	染付碗、皿、土瓶、香炉	18末～19中	C
	250号	碗、皿	17末～18	C
	251号	碗蓋、皿、土瓶蓋	18末～19	C
	271号	皿、大皿	16末～17前	A

*Aの時期の皿が一点混入



第 6 図 古町遺跡A-4区342号遺構土層図

2、11、13は景德鎮窯系、3、6は漳州窯系で、優品の染付が占める割合が高い。そして、このうち2や4など一部の遺物には火を受けた痕跡も観察できる⁽¹⁰⁾。これらを埋めた覆土にも焼土粒子や炭の粒子が多く含まれている。

以上の事実は十七世紀前葉から中葉にさしかかるまでの間に、優品の器をまとめて廃棄しなければならぬ状況が発生したことを示す。

4. 考察

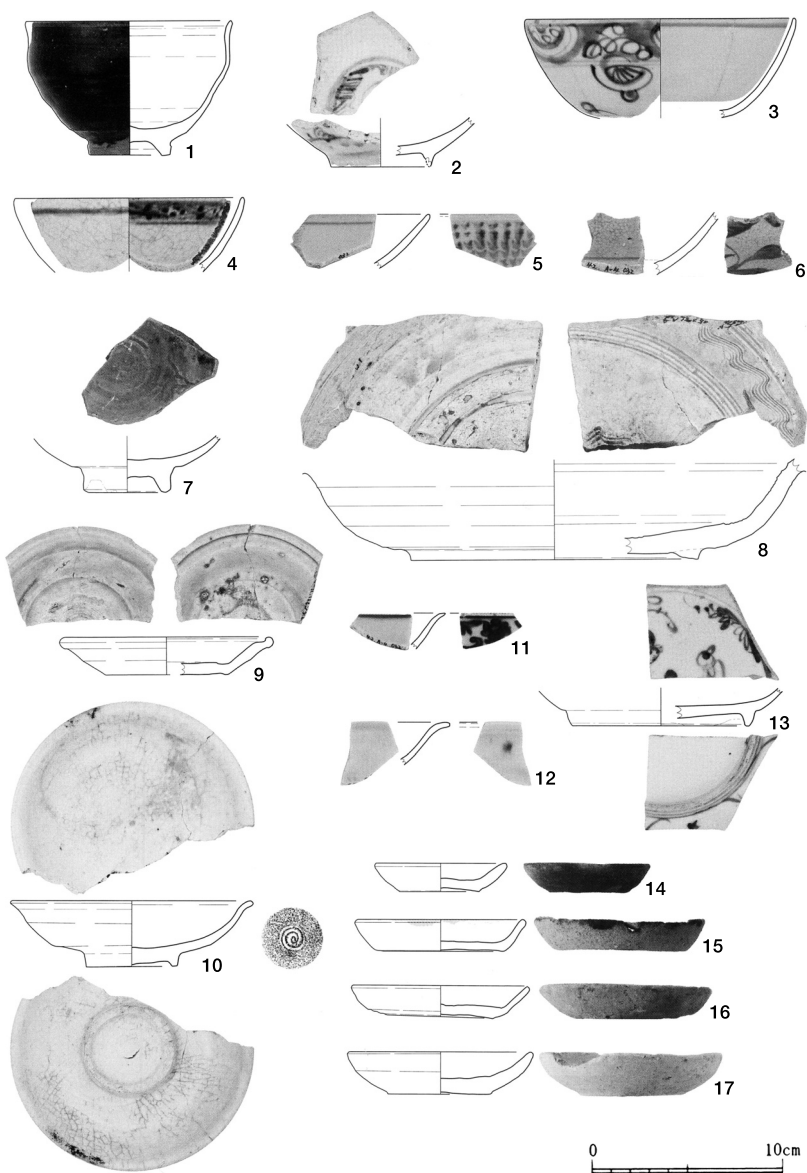
ここまでで明らかにしたのは、以下の点である。

① 熊本城下の町屋で、遺構形成の連続性が途切れる時期がみられること。

② 優品の陶磁器が被熱したうえ、まとめて廃棄されていること。

③ それらが、熊本城飯田丸で遺物の量が激減する十七世紀前葉から中葉にさしかかるまでの事象であること。

熊本城下における①・②の状況は、異常な自然現象もしくは人為的原因によって、社会生活に大きな被害が生じたことを窺わせる。白川の右岸に位置する古町で遺構の断絶をひき起こした原因としてまず候補に挙がるのは洪水であり、確かに十七世紀には洪水も頻発している（森田ほか一九七四など）。しかし、被熱陶磁器の存在や覆土に焼土・炭を多く含



第7図 古町遺跡A-4区342号遺構出土遺物

むことと整合しない。むしろ川沿いの城下町と高台の城内の双方に異変がみられ、その画期が一致し、さらに火災を窺わせる点で、洪水よりも地震が原因と考えた方が理解しやすい。諸記録と突きあわせれば、これらは寛永二年の大規模地震に起因する一連の現象とするのが最も適切である。

本稿の執筆にあたり、矢田俊文先生、桃崎祐輔先生をはじめ、熊本市教育委員会の金田一精氏、藤島志孝氏に多くの御教示と御高配を賜りました。御芳名を記し感謝申し上げます。

なお、本稿は、文部科学省・災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画「日本海沿岸地域を中心とした地震・火山噴火災害関連史料の収集と分析」（研究代表者…矢田俊文）、および科学研究費補助金「二〇一六年熊本地震と関連する活動に関する総合調査」（研究代表者…清水 洋）の成果の一部である。

註

- (1) 本稿は、二〇一六年十一月五日に開催された第4回前近代歴史地震史料研究会で発表した内容（齋藤二〇一六）をまとめたものである。その一部は清水ほか（二〇一七）、矢田（二〇一八）で紹介されている。
- (2) 矢田俊文先生の御教示による。

- (3) 『大日本近世史料 細川家史料』十七卷二〇八号文書
- (4) 図の「5・6層」が注記の5層、「5・6層」の下が表土とされる6層か。

- (5) 『細川家文書 絵図・地図・指図編Ⅰ』七八号文書

- (6) 金田一精氏に御教示いただいた。

- (7) 後藤（二〇一七a）から転載。永青文庫細川家文書、

- 原文目録番号一〇・七・一六

- (8) 後藤（二〇一七a）から転載。永青文庫細川家文書、

- 原文目録番号同前

- (9) 後藤（二〇一七b）八二頁を参照。永青文庫細川家文書

- 原文目録番号同前

- (10) 調査に同行された桃崎祐輔先生に御教示いただいた。

引用参考文献

今村康彦ほか 一九九九『特別史跡熊本城跡石垣保存修理工事・発掘調査報告書―西出丸（奉行所跡）、二の丸御門跡、南大手門跡・南坂―』熊本市教育委員会

北野 隆 一九九三『熊本城―城郭・侍屋敷古図集成―』至文堂

後藤典子 二〇一六『近世初期、熊本城の被災と修復』『KUMAMOTO』第16号 NPO法人くまもと文化 五八―六三頁

後藤典子 二〇一七 a 「細川忠利期における熊本城普請―近世初期の城普請・公儀普請・地方普請―」『永青文庫研究 センター年報』第8号 熊本大学文学部附属永青文庫研究 センター (二) (四二) 頁

後藤典子 二〇一七 b 『熊本城の被災修復と細川忠利―近世初期の居城普請・公儀普請・地方普請―』熊本日日新聞社 齋藤友里恵 二〇一六「一六二五年寛永熊本地震に関する考古学的痕跡抽出の試み」『二〇一六年前近代歴史地震史料研究会講演要旨集』前近代歴史地震史料研究会 八〇九頁
清水 洋ほか 二〇一七「二〇一六年熊本地震と関連する活動に関する総合調査」『自然災害科学総合シンポジウム講演論文集』第五四卷 京都大学防災研究所自然災害研究協議会 一〇三〇頁

鶴嶋俊彦ほか 二〇一四『熊本城発掘調査報告書1―飯田丸の調査―』熊本市熊本城調査センター

原田範昭ほか 二〇〇四『古町遺跡Ⅰ』熊本市教育委員会
宮崎敬士 二〇〇六「熊本地域の地震痕跡」『古代学研究』

第一七四号 古代学研究会 五四〇五七頁

森田誠一ほか 一九七四『熊本藩年表稿』熊本藩政史研究会
矢田俊文 二〇一八『近世の巨大地震』吉川弘文館